

歴史の道をゆく

the history of road

亀田街道 ②



く険しい峠道だったことに由来するとい
う。天正10年(1582)頃、庄内の武藤
氏(大宝寺氏)が由利郡に攻め入って来た
際、秋田氏が友邦・赤尾津氏に援軍を派遣。
この峠(峠)での合戦に勝利したこと、
峠名を「勝山」とも呼んだと伝えられる。

峠を下り亀田城下へ

駒鳴峠から先は、岩城町上蛇田地区へ約
4kmの道程を下る。本来のルートと、どの
程度まで重なっているのか定かでないが、
現道は林道がひどく荒れており、とても車
で走れる状態ではなく、ところどころ敷に
なりながら続いている。上蛇田集落に下る
坂の下りに「観音様」(資料によると馬頭
観音と見られるという)と呼ばれる社があ
り、すぐ先の民家の隣には、道を挟んで庚
申塔と青面金剛らしい石像がある。

民家の前を通って集落に下りた街道は、
蛇川の橋を渡って川沿いに西進。宮ノ下地
区の道筋左手奥には八幡神社がある。下蛇
田を過ぎて六呂田に入れば、ひと山向うに
亀田城下が近づく。亀田城下の愛宕町と上
蛇田の間に新道が開かれる以前、岩城氏
の参勤交代は最上町と大工町の間に置かれ
た六呂田番所から峠を越えて六呂田村に出
ていたと考えられているようだ。六呂田村
は駅場で馬繋場もあったが、新道が開か
れてから衰退したという。

亀田街道・駒鳴峠ルートの今回の見聞
は、ひとまず六呂田までで終わりにしよう。
城下の様子は、次回の山中地蔵越ルートの
松山峠越ルート探訪の際に触れる。



この地図は、建設省国土院院長の承認を得て、
同院発行の1/200,000地形図を複製したものです。(承認番号 平12東地第583号)

● 亀田街道・前回(1回目)紹介ルート
● 亀田街道・今回(2回目)紹介ルート
● 亀田街道・次回(3回目)紹介ルート

由利長根から高尾へ

萱ヶ沢跡の分岐から駒鳴峠越ルート
を採った亀田街道は、雄和町と大内町との
境界をなす尾根筋に出て西進。やがて大内
側に入る。おおむね平坦なこの道は、「由
利長根」と呼ばれた。途中荒れている部分
もあるが、道筋は現在も残っている。
由利長根が終わり山裾の農道に下りた地
点に、大内町が設置した「旧由利長根」の
説明板がある。田んぼ脇の農道を少し進む
と、県道秋田雄利和木荘線に合流。ここにも
「大内町史跡・旧亀田街道」の標柱が立っ
ている。中俣道ノ下地区から峠ノ沢へ向かう
ルートは、ほぼ現道と重なっているという。
高尾川と小関川の合流点付近が、高尾台
から橋岡(南外村)方面に向かう道との追
分だった。川に架かる高尾橋手前南側の民
家の畑の隅(石垣の上)に、道標がある。
磨り減ってよく読めないが、「日天
月天 庚申 右奈ら於か道 左かりわの
道」と刻まれていたらしい。
沢田地区に入ったルートは、旧道沿いに
ある大場酒店の裏あたりを通っていたよう



だが、今は田んぼである。近くの製材所裏
手の木の祠に、自然石の道標や三狼の彫り
物のある石像などが安置されている。道標
は慶応2年(1866)のもので、「右仙北
道 左秋田道」の文字。この場合の秋田道
は、高尾村から北進し雄和町神ヶ折戸に
向かう道のことである。
これらの道標や石碑は、かつては大場酒
店の所にあつたが、それ以前にも何度か移
動して、「そもそもその場所は分からない
い」と店の御主人に聞いた。
沢田集落を過ぎると、右手に金峰神社、
やがて興昌寺。中張バス停の横には地蔵
堂がある。新沢集落の道筋右手にある新沢
八幡神社には、本堂脇に二本の大杉が聳え
ている。延享4年(1747)の石灯籠は
町指定文化財になっていて、神社の左手奥
の山の上が荒谷集落である。街道は八幡神
社の少し先を右折し温泉旅館の「感湯館」
前を通って、いよいよ駒鳴峠への山道に向
かう。「大内町指定文化財 川大内街道跡」
の標識がある。

街道一の難所 駒鳴峠

ここから峠までの現道は2km余り。なん
とか車が通れる道幅のコンクリート舗装の
急坂で、カーブを繰り返しながらおおむね
北西に進む。造林作業などで往時とは全く
様相が変わり、本来のルートの大半は確認
できなかったが、旧街道はほとんど、現道
の右手の林の中を通っていたようだ。
峠に出る少し手前、現道右手の路肩に、
大杉が聳えていて、根元からわずかに清水
が湧出し、小さな水溜まりができています。
ここが御茶立湯跡で、峠越え区間唯一の水
場だった。慈覚大師御授け水とも井峠と
も呼ばれたというこの水場の前を、本来の
亀田街道も通っていたのだろうか。かつては
茶屋が開かれたこともあったらしい。
御茶立湯跡の水で喉を潤し(蛙が卵を産
んでいたが水そのものは癖がなかった)、
100mほど登ると峠の頂に出た。道の左
右に新たに切り開いた林道があり、思っ
ていたより広い平坦地なのは、ブルドーザー
で広げたものだろうか。駒鳴峠は駒泣峠と
も書き、説明板によると、馬も泣くほど辛

1 萱ヶ沢に残る旧道入り口(雄和町碓田萱ヶ沢)

萱ヶ沢から大内方面へ向かう由利長根の入り口。杉林の左側を巻いている小道
がそれにあたる。萱ヶ沢を山に入らずそのまま北進すると雄和町の新波に出る。

2 由利長根地蔵(雄和町碓田大台八木山峠)

新波の一本杉地蔵、折渡峠の折渡地蔵とともに赤田長谷寺の是山和尚の建立と
伝えられ、大正7年、廃道となった由利長根から現在の八木山峠に移された。

3 中俣の民家前の道標(大内町中俣)

「右奈ら於か道 左かりわの道」と彫られたこの道標から、かつてはこの中俣
から山越えをし、南外村橋岡方面との行き来があったことがうかがえる。

4 高尾の道標(大内町高尾)

縦横およそ50cmの大きさで、白っぽい自然石で作られた道標。ほかに「慶應
寅年」西園三十三所などが彫られ、願主として高尾村大友道尚の名が見られる。

5 興昌寺(大内町高尾字沢田)

開創が寛永10年(1633)となる曹洞宗の寺院。戦国末期、赤尾津孫次郎光隆
が先祖の大井光昌の供養に「光昌庵」を建立したことに始まり、岩城氏の領地
となった後の寛永年間「高松寺」と改名、その後現在名の「興昌寺」となった。

6 新沢八幡神社(大内町新沢)

応神天皇を祭神とする神社で、戦国末期この村に館を構えた大井孫二郎が信州
より奉遷したと伝えられる。明治42年に本殿・拜殿が改築されている。

7 下川大内村道路元標(大内町新沢)

県道9号秋田雄利和本荘線と旧道との分岐に立つ道路元標で、昭和26年3月に設
置されたもの。下川大内村とは昭和31年岩谷村・上川大内村と町村合併して
大内村(昭和45年町制施行)となったこの地域の旧村名。

8 駒鳴峠(大内町・岩城町境)

新沢から上蛇田との往還道。標高およそ340mの峠道は馬も鳴くほどの急峻な
山道であった。現在、新沢側からはどうにか車で登ることができる。

9 御茶立湯(大内町・岩城町境の駒鳴峠)

駒鳴峠は、別名、井峠(いとうげ、いとぎ)ともいわれ、是山和尚ゆかりの清
水が湧いている。亀田藩主が領地見回りの折お茶を飲んだとも伝えられる。



亀田街道